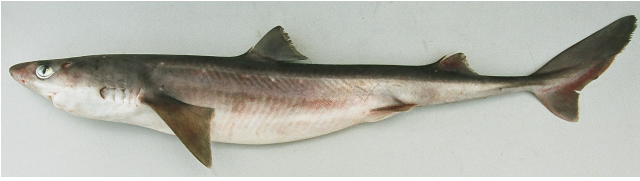


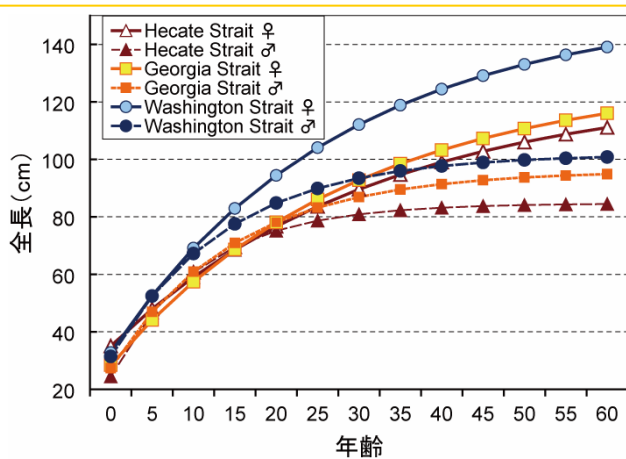
アブラツノザメ 日本周辺

Spiny Dogfish, *Squalus acanthias*

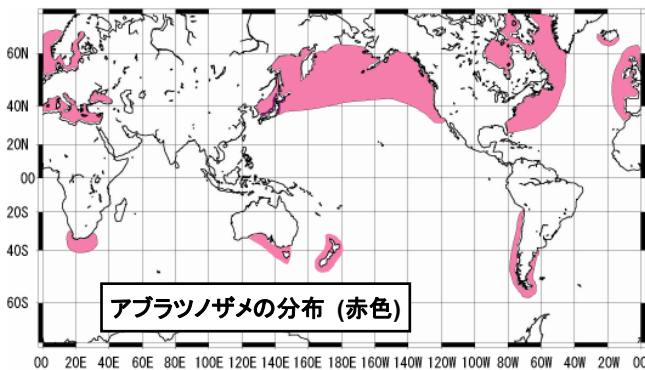


生物学的特性

- 寿命: 60 歳以上
- 成熟開始年齢: 雌 23 歳、雄 14 歳
- 産卵期・産卵場: 2~5 月、産卵場は調査中
- 索餌期・索餌場: 調査中
- 食性: 魚類、頭足類
- 捕食者: 調査中



雌雄別・海域別の年齢-全長関係 (Ketchen 1975 より作成)



漁獲の動向

1952~1955 年の平均漁獲量は 4 万 2 千トンに達した。沖底による 1970 年代の漁獲量は 2,000 トン前後であったが、その後次第に減少して、1990 年代以降は 1,000 トン以下になっている。2005 年の沖底の漁獲量は 295 トンで 2004 年より増加した。青森県における沖底以外の漁獲量も 1999 年の 540 トンから 2005 年は 190 トンに減少している。

最近一年間の動き

2005 年の沖合底びき網漁業(以下沖底)の漁獲量は太平洋、日本海ともに 2004 年より減少した。太平洋尻屋崎海区、日本海の CPUE は減少し、太平洋では若干増加したが、依然低い水準にある。

管理・関係機関

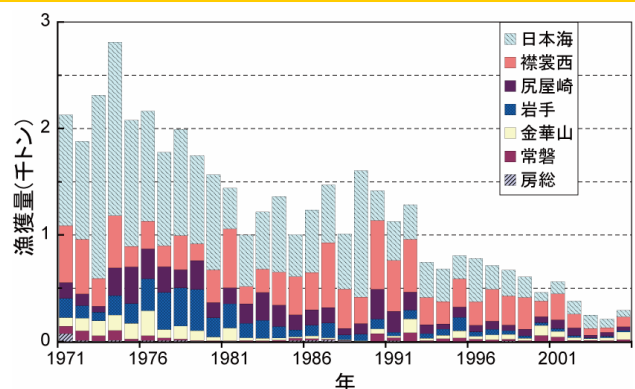
ワシントン条約の 2004 年の第 13 回締約国会議で、ドイツは本種を附属書 II に提案する予定だったが、各国との事前協議の結果、本会議には提案されなかった。しかし、2007 年の第 14 回締約国会議で附属書 II に提案する動きが再び始まっている。

利用・用途

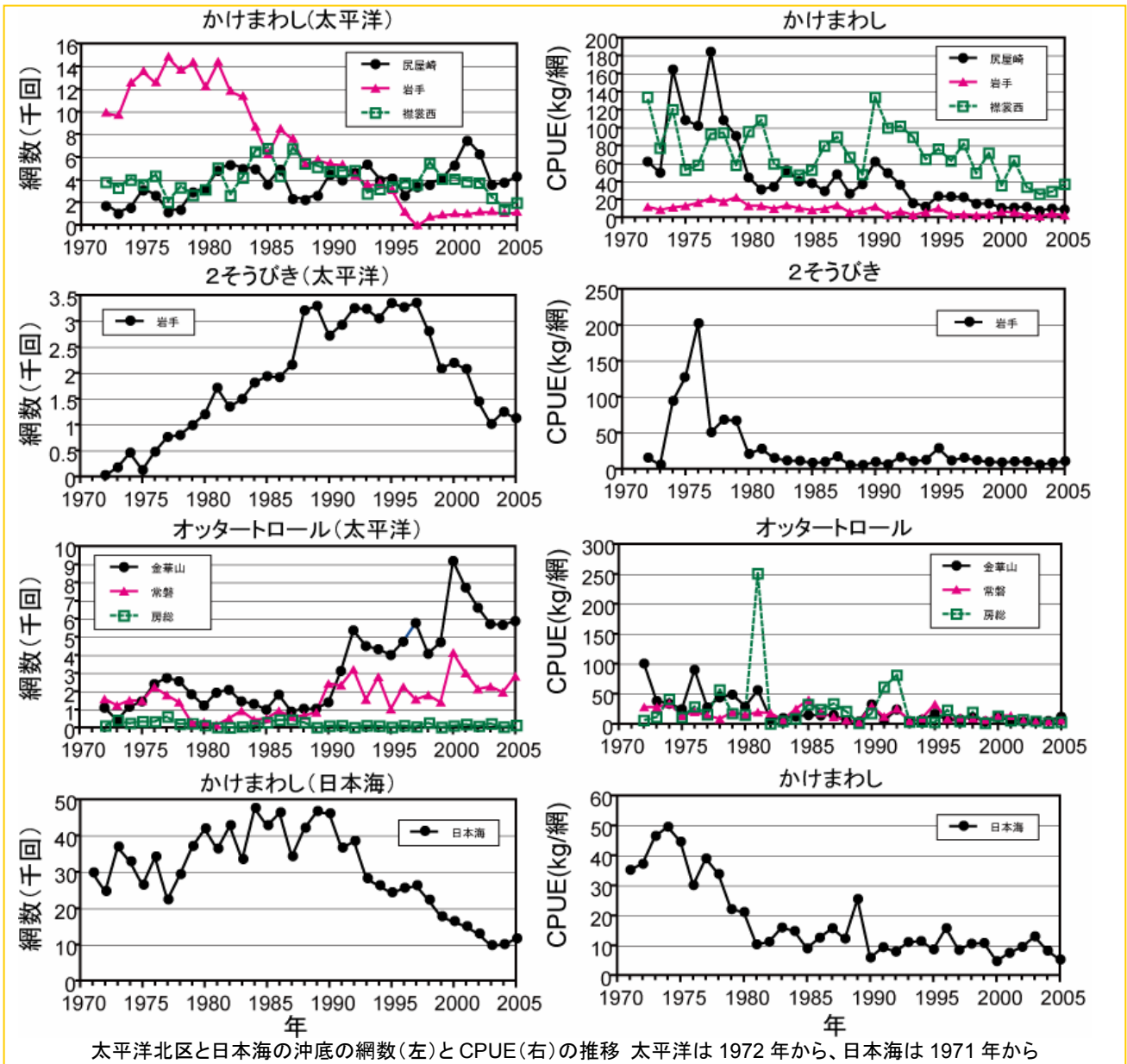
練製品の原料にするほか、焼き魚、煮魚にし、冬季には刺身やぬたにする。肝油やサメ軟骨エキスなど健康補助食品の原料としても利用される。

漁業の特徴

北日本や日本海ではかなり古い時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されるようになったのは、明治 30 年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ縄漁船の兼業として行われた。その後昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い、主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。近年は沖底による漁獲のほか、青森県では、はえ縄や一本釣り、さし網等の漁獲があるが、漁獲量は昭和 30 年以前と比較して大きく減少している。



沖合底びき漁業によるアブラツノザメの海区別漁獲量



管理方策

本種の寿命が極めて長いこと、および成熟に達するのに雌で23年、雄で14年を要することを考えると、1950年代の資源水準への回復は極めて困難と思われる。これ以上の資源の減少を防ぐためには、努力量を現状よりも増加させないことが望まれる。

資源管理方策まとめ

- 寿命が極めて長いこと、資源の回復は困難
- 漁獲努力量を現在よりも増加させない

アブラツノザメ(日本周辺)の資源の現況(要約表)

資源水準	低位
資源動向	減少
我が国の漁獲量(最近5年間)	469~935トン※ 平均:673トン

※漁獲量は沖底(太平洋北区、日本海、北海道)と沖底以外による青森県の漁獲量の合計

資源状態

漁獲量は1952年に約6万トンに達し、その後大きく減少し、主要漁業の沖底の漁獲量は1993年に太平洋北区と日本海で1,000トン以下になり、さらに減少傾向にある。1950年代は近年よりかなり積極的に本種を漁獲したと考えられ、漁獲量の差は資源水準の差を単純には反映していないが、資源水準には大きな差があると推測される。また、1970年代以降の沖底の漁獲量は減少し、尻矢崎海区と日本海でのCPUEも大きく低下した。これらのことから、本資源の水準は低位で、減少傾向と判断される。

資源評価まとめ

- 漁獲量は1950年代に比べ極端に減少
- 1970年代以降の漁獲量は減少傾向
- 近年の沖底のCPUEは低水準で低下傾向
- 日本海では漁獲努力量が減少